
星空

森秋緋色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星空

【Nコード】

N9330V

【作者名】

森秋緋色

【あらすじ】

星空の歌があった。

七夕の日、遠い星のあの人を思う、星空の歌。

歌を聞いた。

かの有名画家ヴィンセント・ヴァン・ゴッホの描いた『星空』の
ような歌だ。

もしかしたら私の他にも聞いたことがある人がいるかもしれない。

私だってさっき聞いたばかりだから．．．．．

ゴッホは星空を立体的に見ることがあったらしい。

近くの星の光のもっと奥にまた星があつて、そのまた奥に星の層
があつて。

そんな星の層がずっと続いている様な．．．．．

そしてその一番近くの星は、自分のすぐそばにいるような、そんな
感覚を持っていたらしい。

歌もちよつと似ていた。

たくさんの人の中で一番大事ですぐそばにいるような人。
その人は、その年の七夕の前の日に亡くなってしまった。

七夕の日に夜空を見上げると、たくさんの星の中にその人がいる
ような気がした。

川に映し出される星空。 畔には短冊が飾りつけられた笹がサラサ

ラと揺れている。

星空に触れたくて思わず川の水に触れるけれど、星の光は無邪気に揺れるだけだった。

何故か他の星達があの人を星を遠くに連れて行ってしまう気がして「連れて行かないで」とささやいてしまう。

もう一度見上げると、ぼやけた星空はそれでも綺麗だった。

風が笹や短冊を撫で、川を撫で、また無邪気に星空が揺れる。

あの人がいる星空を、頬に流れた涙が閉じ込めた。

せめて今だけは、そばにいてほしいと。

（後書き）

歌を聞いて、ゴッホの絵が浮かび、書こうと思いました。

まだまだ勉強の足りない文章で申し訳ないです。

切ないけど綺麗な描写を目指しましたが、そう感じてくれたらとても嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9330v/>

星空

2011年10月8日12時49分発行